

明治時代の社宝の虫干し

伊奈波神社教学研究員 眞理子

伊奈波神社には古くから多数の奉納品がありました。江戸時代の社宝の全容ははつきりしません。明治時代にはたびたび寺社の宝物調査があり、伊奈波神社からも何度も社宝の届け出がなされました。その最初は明治九年(一八七六)で、次の十二件があげられています。①石剣、②古縁起(三巻)、③文永四年(一二六七)銘、藤原経朝書「正一位因幡大神」板額、④木造狛犬、⑤慶長二十年(一六一五)銘の獅子頭、⑥備前国正恒作の太刀、⑦『烏帽子岩記』(烏帽子岩の由緒書)、⑧『獅狛銘』(獅子を奉納したさいの由来書)、⑨天正四年(一五七四)銘の石造狛犬、⑩「因幡宮」銘の古釜、⑪織田信長寄進と伝える織田家紋入り幕、⑫楽太鼓。

明治十二年には複数の社宝リストがあります。そのうちやはり十二

このとき第一の部屋を中心となった石剣は、現在も伝えられている石棒のことです。石棒については本誌第八号(平成十九年一月発行)に日比野悌明権禰宜によりくわしく説明されていますが、縄文時代の祭器の一種で、伊奈波神社の石棒は長三十八センチ、中央部の径は十・五センチあります。これを納めるため、唐櫃が明治五年に小熊村から奉納されました(左の写



件を記載したものは明治九年の社宝のうちの⑦⑧⑩に替えて貞享二年(一六八五)の棟札・徳川家康の伝馬朱印状・大久保長安の制札を入れています。朱印状と制札は江戸時代の岐阜町の諸役免許特権の根拠となる大切な文書で、かつては岐阜奉行所の東照宮御朱印蔵に納められていました。このころには他にも、濃州住兼里銘の太刀、勢州住村正銘の鉾、「東照宮垢着」などをあげるリストも作成されています。東照宮垢着とは徳川家康が身に着けた袴です。明治十二年に東照宮を境内愛宕山に再建するとき、家康ゆかりの品の寄附を旧尾張藩主の徳川慶勝に願って実現したのが、この袴でした。

これらの宝物を伊奈波神社では明治十八年旧七月十七日から一週間、「虫干し」しました。この日は大安で、

真。「当社二古来ヨリ伝ハル第一ノ神宝」とされ、明治初期にその存在はかなり広く知られていました。明治三三ころ、教部省の官吏が陵墓視察に岐阜に出張してきたとき急にこの石棒を拜見したいと言いついたため、急ぎ持参してほしいとの依頼状が伊奈波神社文書に残されています。依頼者は名前の一部が虫食いのため読めませんが、千村家の家臣で『美濃国泳宮略記』などをあらわした櫛田道古ではないかと思われます。また、明治十四年四月には、松浦武四郎が石棒を拝観しました。武四郎は幕末の北方探検家でした。蝦夷地を調査し、「北海道」の命名者としても知られています。開拓使を辞してからは全国を遊歴しましたが、明治十四年には櫛田道古の案内で伊奈波神社を訪れました。境内のようすを「社はいなば山の麓にして市中にのぞめり。前に芝居定小屋ニテ所、左右坊有し由なり。今は社家となりたり。左右山聳え、樹木陰森。

新暦では八月二十六日に当たります。ただし単なる虫干しではなく、今日いうところの展覧会と呼ぶにふさわしいものでした。場所は社務所内と思われ、残された図面から会場のようすを知ることができます。それによると三部屋を使って展示したようです。

第一の部屋には壇を設け、上段に棟札二点(貞享二年、年不明)、槌二点、石剣とその両脇に饗、石眼。下段に家康垢付袴、家康朱印状、書付(これは慶長五年付けの家康禁制しよう)、大久保長安制札を並べました(下の写真)。なお、石眼とは重さ二十一キログラムの球形の石で、この年に祈禱殿を建築したとき岩石中から見つかったものです。

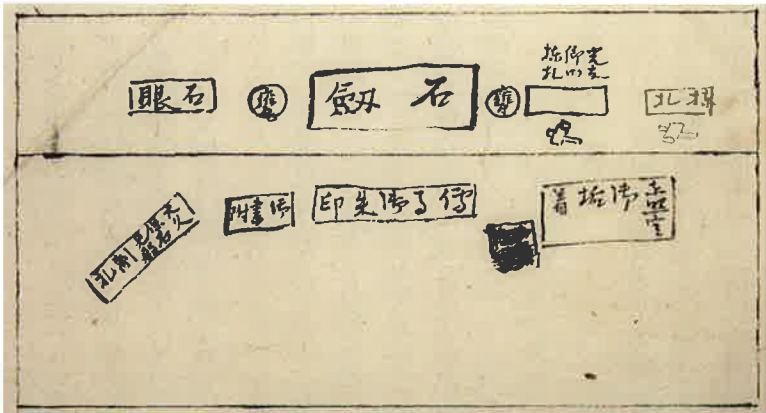
第二の部屋は長机を部屋の三面に並べてその上に展示したようです。ここには、十二ヶ月花鳥和歌などの文学関係、古瓦、正恒作の太刀など刀剣コーナー、『烏帽子岩記』、『獅狛銘』、縁起三巻、文永四年板額、古釜、狛犬、

観音堂、弥陀堂、薬師堂。坂道をのぼること二、三丁、石壇多く中々美々敷、華表、拜殿、鐘楼、もこし屋、末數十ヶ所有」としています。石棒のことは「雷槌を出す：色黒くしてまた世の物とは異なるなり」と雷神が手にする槌とし、その姿をスケッチしました。同時に、文永四年の板額も拝観して縁の彫刻に感心しています。

この虫干しのときに展示された宝物は大半が今も伝えられ、岐阜市歴史博物館に寄託されています。しかし、中には姿を消してしまったものもありました。その原因は明治二十四年の濃尾震災です。地震と続いて起こった火災により、境内の建物で残ったのは二棟の神庫と社務所だけでした。火の手が神社を襲ったとき、祠官であった塩谷幸満は急いで神体を守ろうとしましたが、重くて運ぶことができませんでした。そこでまず神宝・古額・棟札などを出したところで社丁の喜一と出会い、二人で力を合わせて四柱の神体を

獅子頭が並びました。

第三の部屋は中央に関ヶ原合戦図を置き、壁面二面に設置した大机上に個人所蔵者から借用した古陶器や古面、やしり・鉄具などの出土品を展示しました。「虫干し」は以後毎年開催する予定でしたが、いつまで開かれなかつたかは不明です。



白木綿で包んで山上に遷し、新しい薦を敷いて奉座したと『震災記』に記されています。先に挙げた宝物のうち、織田家紋入り幕・楽太鼓は焼失、獅子頭の右耳は脱落紛失しました。葵紋付き櫃に入れて東照宮社殿に納められていた家康の伝馬朱印状・垢付袴・大久保長安制札も櫃とともに焼失、ほかにも神鏡、神輿、多数の刀剣と祭具が失われました。祭礼に引き出される山車の多くが姿を消したのもこのときです。

震災以前にも、岐阜城主の織田信孝が羽柴秀吉と対立した天正十一年(一五八三)の戦乱や、明治維新期の混乱により失われた宝物もあります。神社の宝物は、その多くが奇進によるもので、そこには神社に寄せる人びとの想いが込められています。たび重なる危機をのりこえて今に伝えられる社宝は、そうした想いの積み重ねと、それを守る社人たちの努力によって残されてきたのです。